外心複合語の認知言語学的分析

萩澤大輝（神戸市外国語大学［院］）

1. はじめに

英語には下のような VN 構造の語があり、これはいわゆる外心複合語の一種である（以下、単に外心複合語と呼ぶ）。いずれも右方主要部の原則が成り立たず（例えば pickpocket は pocket の一種ではない）、語全体として行為者や道具などを表すという特徴を持つ。

(1) 有生：pickpocket, spoil-sport, know-it-all / 無生：breakfast, passport, makeshift, cure-all

本発表は、この特徴がメトニミー的拡張に基づくという Schmid の分析を踏襲し、これには単純語の多義性（例：cook 調理する／調理人）と統一的に説明できるなどの利点があると指摘する。この議論から「英語の母語話者は外心複合語$[VN]_N$を動詞句$[VN]_{VP}$と関連づけて理解している」という予測が生じるが、これは多くのデータから支持される。

2. メトニミーによる分析とその利点

先行研究の多くは母語話者の言語知識の解明という点からすると不十分である。通時的には古フランス語の命令法に由来するが（Marchand 1969）、これは現代の母語話者が有する素朴知識とは独立である。また外心複合語が名詞であることは VN 構造内の名詞からの素性浸透と考えることも可能だが（Scalise et al. 2009）、その場合 pickpocket が pocket とは違って有生物を表すことが説明できない（^{OK}a pickpocket who ... / *a pickpocket which ...）。

本発表は Schmid（2016）の分析を採用し、外心複合語の解釈は「ある特徴的な行為からそれが喚起するフレーム内で際立った参与者にプロファイルを移す」という一般的なメトニミーによる動機づけがあると考える。このメトニミーを単純語で例示すると次のような語が該当する。

(2) 有生：act, cook, flirt, guard, judge, spy / 無生：guide, help, press, wash, wrap

外心複合語の場合、要素たる V と N が「特徴的な行為」を同定する手がかりとして貢献し、そこからメトニミー的に「際立った参与者」への（すなわち行為者や道具など一般に外心複合語が表す概念への）プロファイルシフトが生じるわけである。

本発表独自の主張は次の 2 点である。(i) メトニミーによる分析に従うと、形態論固有の問題と見なされてきた外心複合語を他の現象と統一的に説明できる。(2) に示したように、行為から行為者・道具への意味拡張は何ら例外的なものではない。そして行為者と道具にまたがるという特徴は、接辞-er や他動詞文の主語にも同様に見られるものである。

(3) speaker：話し手／拡声器、walker：歩く人／歩行器

(4) a. *I* opened the door with this key.

b. *This key* opened the door. （西村 1998：114）

（ii）外心複合語を通じて、品詞決定をめぐる「捉え方」と「構文」の関係について整理できる。そもそも外心複合語が例外扱いされることの一因には、（完全な）合成性を前提とした意味観がある。すなわち「ある語が行為者や道具を表すのであれば、それをコード化する明示的な形態素（すなわち主要部）があるはずだ」という前提である。しかし認知言語学の議論が正しければ、意味（品詞）を決定するのは形態素ではなく、概念化者による捉え方である。その捉え方の「明示」（ostension）に用いられるのが形態素・構文であると整理することができる（Langacker 2009, Scott-Phillips 2014）。

例えば pickpocket がプロセスではなくモノとして捉えられるとき、それを明示する具体的な形態素がなくても、$[VN]_N$ という抽象的な構文によって、さらには決定詞に後続するなど具体的な生起環境によって、モノ的な捉え方が明示されているわけである。

(5) a. the goalkeeper：具体的な形態素-er、具体的な生起環境がモノ的な把握を明示

b. the pickpocket：抽象的な VN 構文、具体的な生起環境がモノ的な把握を明示

3. 構文のネットワーク

V・N という要素が表す行為をプロセス的に捉えるといわゆる動詞句になり、その行為が喚起するフレーム内で際立った参与者に指示が移ると外心複合語になる、という本発表の議論から「英語の母語話者は外心複合語$[VN]_N$ を動詞句$[VN]_{VP}$ と関連づけて理解している」という予測が生じる。このことの傍証として外心複合語の幅広い構文ネットワークを示す。以下、順に（i）VN の構造は共通しているが意味は異なる一連の複合語とのネットワーク、（ii）動詞句と類似性の低い複合語から類似性の高い複合語にいたるネットワーク、そして（iii）転換ないし引用表現とのネットワークである。

（i）観察範囲を広げると、現代英語には外心複合語のほかにも VN 構造をした複合語が数多く見つかる。

(6) crybaby (= a baby who cries)　　attack dog (= a dog which attacks someone)
drawstring (= a string which is drawn)　　kickball (= a game where a ball is kicked)

いずれも V・N の各要素が手がかりとなって特定のフレームが喚起され、それを元に多様な対象へのプロファイルシフトが生じていると考えられる。このように見ると外心複合語は例外扱いする必要はなく、上記のような VN 構造をした複合語からなる構文ネットワークの一事例として自然に位置づけることができる。

（ii）名詞 cook と動詞 cook は音韻的には同一であり、意味的にも「調理」という同一のフレームが喚起される関係にある。両者の類似性は極めて高く、同一の語彙項目の異なる意味として扱われる（いわゆる多義）。一方、外心複合語の pickpocket は動詞句 pick (one's) pocket と音韻的に共通部分はあるものの同一ではない。このため動詞 cook から名詞 cook へのメトニミー的拡張と同じ意味での拡張を、動詞句 pick (one's) pocket と外心複合語 pickpocket の間に想定するのは困難である。しかし、本発表は共時的な観点から母語話者の素朴な言語知識を考察するものである。pickpocket という語形は（通時的な由来はどうあれ）すでに慣習化した語として存在している。したがって重要なのは、この語を理解するにあたって pick と pocket が喚起する「スリ」フレーム内でメトニミーが働くという点であり、使用のたびに動詞句 pick (one's) pocket を介してメトニミー的拡張が行われるという想定はそもそも採らない。

とはいえ、一部の VN 構造にはモノ的な捉え方でもプロセス的な捉え方でも音形があまり変わらないものがある（7a）。また逆に、限定詞を伴うタイプの外心複合語も存在し（7b）、これも動詞句との類似性は高い。これらはいずれも cook に見られるメトニミー的な拡張と類比的に考えることに抵抗は少ないと思われる。

(7) a. [makeshift]$_{N}$ / [make shift]$_{VP}$, [know-it-all]$_{N}$ / [know it all]$_{VP}$（cf. [c**ó**ntrast]$_{N}$/ [contr**á**st]$_{V}$）
b. Etch-A-Sketch, tilt-a-whirl, whack-a-mole

外心複合語の規定として「古フランス語の命令法に由来する語」という通時的な基準ではなく「VN という構造で行為者や道具などを表す語」という共時的な基準を採用すれば、pickpocket のように動詞句との類似性が比較的低いものから（7）などのように高い類似性を示す語まで、連続したネットワークをなしていると見なすことができる。

（iii）さらに動詞句との類似性が明白なのが、転換ないし引用表現である。従来、これは外心複合語として扱われてこなかったが、これは単に通時的基準により外心複合語の外延が決められる傾向があったからにすぎない。動詞句と類似性の高い慣習的な転換には also-ran, must-have, knock-down-drag-out などがある。また外心複合語として扱われることの多い know-it-all には否定や埋め込みが生じる例があり、動詞句との関連が意識されているのは明らかである。こうした一連の表現をどこで線引きするかは分析者次第である。

(8) James Stewart, in American everyman mode, plays the **doesn't-know-it-all** to perfection, thrust into the world of deceit and deception, in a perfect bit of Hitchcockian casting. (GloWbE)

(9) It's not our fault that it didn't work, it's those **think-they-know-it-all** bloggers and their pesky freedom of speech. (GloWbE)

なお、V-it-all 構文には次のような拡張事例が見つかるが、これは形態素-er を使って表現しにくいことが動機づけの 1 つとして考えられる（cf. *it-all-knower）。

(10) Not only are men wired differently (they don't put the same emphasis on **spill-it-all talkathons** that we do), but they've also been socialized to keep the most intimate parts of themselves hidden. (COCA)

本発表は形態論内部で扱われてきた外心複合語を多様な現象と接続した点が特色であり、認知言語学における品詞論にも示唆を与えるものである。近年では進化言語学でも注目が集まっており、認知的な立場から分析を提出したことには意義がある（藤田 2017）。

【参考文献】藤田耕司（2017）「経済性理論から極小主義まで」畠山雄二（編）『理論言語学史』57-114, 東京：開拓社.／Langacker, Ronald (2009) Constructions and Constructional Meaning. In Vyvyan Evans and Stephanie Pourcel (eds.) *New Directions in Cognitive Linguistics.* 225-267. Amsterdam: John Benjamins.／Marchand, Hans (1969) *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation*. 2nd edn. Munich: Beck.／西村義樹（1998）「行為者と使役構文」中右実・西村義樹『日英語比較選書 5 構文と事象構造』107-203. 東京：研究社.／Scalise, Serigo, Antonio Fabregas, and Francesca Forza (2009) "Exocentricity in Compounding" *Gengo Kenkyu* 135, 49-84.／Schmid, Hans-Jörg (2016) *English Morphology and Word-Formation: An Introduction.* 3rd, revised and enlarged edn. Berlin: Erich Schmidt.／Scott-Phillips, Thom (2014) *Speaking Our Minds: Why Human Communication is Different, and How Language Evolved to Make it Special*. London: Palgrave Macmillan.